

みずとめまい
水止舞

別称：みずとめのまい、みずどめ(の)まい、すいしまい

都指定文化財（無形民俗）

昭和38年（1963）3月19日指定

伝承地：^{ごんしょうじ} 厳正寺 大森東3-7-27

交通アクセス：京浜急行本線大森町駅から徒歩10分

実施日：7月第2日曜日（令和3年以前は7月14日）



(いずれも令和4年7月10日撮影)

厳正寺の水止舞は、名前のとおり全国的にも珍しい「^{ほうのう}雨を止めるための舞」を奉納する民俗芸能です。成立年については諸説ありますが、一般的には^{ほうみつしょうにん}厳正寺二世法密上人の頃に干ばつが起こり、地元住民の願いを受けて^{わらりゅう}藁の^{あまご}龍^{きとう}を作って雨乞いの祈禱をしたところ雨が降ったが、その2年後に今度は雨が止まず困ったので^{しし}獅子の面^{しし}を作って雨止めの祈禱をしたことが由来である、と伝えられています。

現在の行事は、^{こじ}上記故事^{みちゆき}にならい雨を求めて龍を導く道行(写真左)と、雨止めの獅子舞(写真右)の2部構成となっており、前者は厳正寺前の公道で、後者は境内に設置された舞台で行われます。道行では雌雄2匹の龍に入りほら貝を吹く大貝が周囲から水を撒かれながら運ばれ、その後ろに警固の子ども達、^{はなかご}笛吹き、^{おおがい}花籠^ま、^{すいこう}三匹獅子^まが随行して厳正寺に向かいます。舞台に上げられたところで龍の役目は終わり、^{ほど}解かれて舞台の周囲に土俵の様に配置されます。なお、この藁の龍は水浸しになり再利用ができないため、頭部以外は毎回新しいものが製作されています。かつては大貝役が腰回りに巻いて自立歩行できる程度の長さ^{おんなまい}と重さ^までしたが、昭和38年の文化財指定を機に見栄えを良くするため大型化し、現在のように担いで運ばれる形式になりました。

続いて舞台上では、3名の獅子役（^{おじし}雄獅子、^{なかじし}中獅子、^{めじし}雌獅子）とササラという竹製の楽器を鳴らす2名の花籠が、笛と唄に合わせて演目を行います。^{おんなまい}女舞、^ま出舞に続いて雨止めの舞（トーチャー口、コホホン）が行われ、その後は「雌獅子隠し」というストーリーに沿って進行し、雄の獅子2匹（雄獅子、中獅子）が雌獅子を取り合うさまや、最後に仲直りをするさまなどが演じられます。